

佐賀県で繁殖したコウノトリの巣と雛の剥製・骨格標本について

陣内 裕美

1 はじめに

コウノトリ *Ciconia boyciana* は、かつては日本で繁殖していたが一度日本から姿を消してしまった鳥である。戦前から兵庫県北部で天然記念物として保護され、1956年には特別天然記念物（文化財保護法）に指定された。1971年に国内で野生のコウノトリが絶滅したが、兵庫県が保護増殖事業と野生復帰事業を主導し、コウノトリの人工繁殖に成功。2005年に兵庫県豊岡市で試験放鳥が始まり、野外で順調に個体数を増やしている。現在は自然繁殖もしており、それらが各地域でも見かけられるようになった。

成鳥は全長が約110cm、翼開長が200cm前後、体重が4～5kgになる大型鳥類である。全身は白色で、風切羽とくちばしが黒く、足は紅色をしている。若鳥のくちばしは赤味があり、足も淡い紅色をしている。一見するとタンチョウなどのツル類と似ているが、くちばしは大きくて黒く、足は全てが赤い。またツル類は木などに止まらないが、コウノトリはよく止まるなどの違いがある。長い足で水辺や水田を軽やかに歩いて、魚類、両生類、爬虫類などの多様な餌を丸のみにして食べる肉食の鳥である。豊富な餌生物が生息する環境がないと生きられない生物である。

県内では、2022年に白石町で飛来と繁殖が確認され、その翌年にも飛来し繁殖後、県内で初めて幼鳥の巣立ちが確認された。

本稿では、2022年に白石町内で営巣された巣について、繁殖期の終了後に文化財保護法に基づく滅失の届け出がなされた後、撤去されたもの（図2）を当館で引き取り、各部位に分けたその構造について報告する。また、2023年に県内白石町に

で繁殖し、成長過程で落鳥した雛2体のはく製化についてもここに報告する。



図1 2022年12月20日コウノトリの巣撤去時の様子

2 巣の構造について

鳥は繁殖する際に巣を利用する。本稿では、主な巣の構造として、中心部分の卵が乗る場所を産座、産座の外側を取り囲む部分を内巢、内巢をさらに外側から覆う外巢に分けてその特徴について記す。

2022年5月初旬に白石町でコウノトリのペアが営巣した巣は、町内の電柱頂部に造られた自然巣である。この巣は、カラスが営巣したものをコウノトリが乗っ取って増築した巣で、巣の外巢の最大直径は幅約100cm、高さ約30cmとコウノトリの巣としては比較的小ぶりの巣であった。

コウノトリの巣の構造は、太い枯れ枝などで巣全体を取り囲んだ外巢（図3）と、外巢で取り囲まれた内巢（図6）、その上に皿形の産座（図4）が乗った三層構造に区別された。巣の大きさは、外巢径約95±10cm、内巢径約70±10cm、産座径約65±10cmであった。

巣をつくるために持ち込まれた巣材には、内巢に枯草やツタ、細い木の枝などが敷き詰められており、周りを囲む外巢には、枯れ枝が産座と内巢の外周を取り囲むように組み合わせられ、外の部

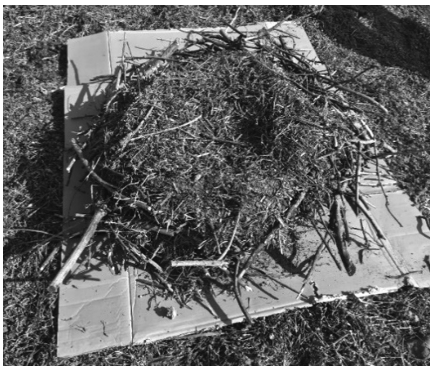


図2 2022年に白石町内で営巣された
コウノトリの巣



図3 お椀形のカラスの外巣(上部)と
その周りに増築されたコウノトリ外巣

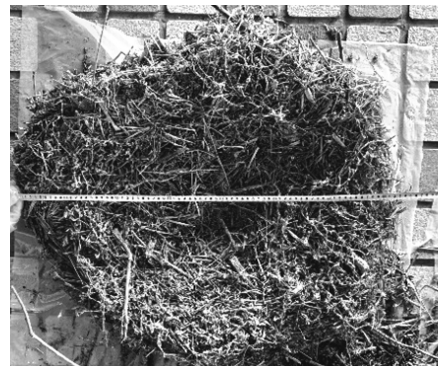


図4 コウノトリの皿形の産座



図5 カラスの内巣



図6 (図4)産座の外側を取り囲むコ
ウノトリの内巣

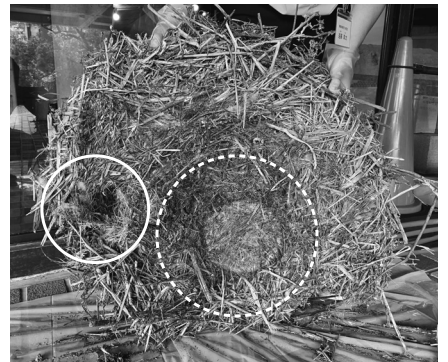


図7 コウノトリの内巣裏面の他小鳥
類の巣(○枠内)とカラスの巣型跡(点線
○枠内)



図8 その他のコウノトリの巣材(左から:大麦の穂、糞もしくはペリットのようなもの、植物のツル、ナイロン紐、クロコガネの一種)

分ほど太く長くなっていた。産卵し、雛を育てる産座部分は、植物の皮や、土のついた植物根、ナイロン紐などの柔らかい繊維質のもので、押し固められるように皿形に成形されていた。

先述のとおり、今回調べた巣は、カラスの巣が乗っ取られたものであったため、コウノトリの内巣の下に、カラスの巣の内巣(図5)および外巣も確認できた。カラスの巣は、内巣径約 30 ± 10 cm、外巣径約 45 ± 10 cmであった。内巣部は、皿形に木の枝を編むようにつくられており、外巣部は、コウノトリの外巣と組み合わせさせた状態で確認された。産座については区別して確認することができなかった。

また、その他の構造として、コウノトリの巣の内巣裏面に、他の小鳥類が営巣したと思われるも

の(図7)も確認された。他種の営巣は、事例として確認されており、防衛力の強い大型の鳥の巣の周囲に営巣することで、外敵を避けたと考えられる。

小鳥類の巣と思われる巣材には、多量の細長い枯草を使用しており、側面に入口(径約14cm)のある球形(奥行き約15cm)の外巣と、巣の中に産座となる枯草の繊維、羽毛などが確認された。種の特定には至らなかったが、コウノトリの繁殖の見守りをされた、日本野鳥の会佐賀支部会員の方と話した際、スズメをコウノトリの巣の下でよく見たとの事だったので、スズメの巣であると考えられる。



(左) 図9 生後2週齢と生後1ヶ月齢のコウノトリ雛はく製
(右) 図10 生後1ヶ月齢のコウノトリ雛骨格標本

3 雛の剥製・骨格標本について

コウノトリは、2022年以來白石町への飛来、営巣が確認されている。2023年に同町で繁殖し、5月に卵から孵った雛が、成長過程で落鳥し死亡してしまつた2体(生後2週間齢、1ヶ月齢)を、学術標本として保存するため、当館で引き取り、製作委託し、はく製化を行った。製作は、ほねとはね 標本師の藤田達也氏に委託した。

はく製化した雛のそれぞれの全長は、生後2週間齢：約30cm、生後1ヶ月齢：約60cmで、解剖の結果からいずれもメスであることが分かつた。また、1ヶ月齢の雛については、はく製(図9)と骨格(図10)の両方を標本とし保存することとした。

コウノトリは、特別天然記念物(文化財保護法)と国内希少野生動物種(種の保存法)として、主に2つの法律によって保護されている野鳥であり、雛は、巣立つまでの間、巣の上にはしか居ないためなかなか間近で観察することが難しい。当館で2体の雛の標本を活用することによって、県内で見られる野鳥としてコウノトリをより身近に感じてもらい、成鳥と雛の特徴の違いや、生態に対する興味喚起に繋がることを期待したい。また、コウノトリが繁殖できる自然環境が身近にあることや、コウノトリの生態保護への理解が深まるきっかけとなれば幸いである。



図11 テーマ展「自然遺産」でのコウノトリの巣展示

4 おわりに

今回報告したコウノトリの巣と、雛2体のはく製と骨格標本は、令和8(2026)年度1月17日(土)から2月26日(木)まで、佐賀県立博物館にて開催したテーマ展「自然遺産—天然記念物から見た佐賀の自然—」で展示を行った(図11)。

本調査を行うにあたって、白石町教育委員会生涯学習課 米田実氏、兵庫県立コウノトリの郷公園 松本令以氏、日本野鳥の会佐賀支部会員の皆様には、コウノトリ関連の情報提供や、巣とコウノトリ雛の提供にご協力をいただいた。また、コウノトリの巣の分解では、2023年7月に実施した「先生のための博物館・美術館講座—自然史分野」受講者の方々と、2024年7月に実施した、職場体験参加者の松梅中学校生3名にご協力をいただいた。これらの方々に深く感謝申し上げる。

参考文献

- 吉村卓三(2014) 鳥と卵と巣の大図鑑, コウノトリ, ブックマン社, 75p
- 三上修(2019) 鳥類による人工構造物への営巣: 日本における事例とその展望, 日本鳥学会誌, 68(1): 1-18.
- 本田裕子(2020) 豊岡市内の小学校・中学校・高等学校におけるコウノトリのはく製の保管・利用状況, 野生復帰, 8: 31-42.
- 松田聡(2021) 文化財として保護されたコウノトリ, 野生復帰, 9: 77-81.
- 田開寛太郎(2022) コウノトリの野生復帰における「共生」概念の変遷, 環境共生, 38(1): 85-96.
- 日本野鳥の会佐賀支部(2023, 8) 野鳥さが, 247: 6-10
- 叶内拓哉(2024) 自然散策が楽しくなる! 見わけ・聞きわけ 野鳥図鑑, コウノトリ, 株式会社池田書店, 166p
- 兵庫県立コウノトリの郷公園(2025) コウノトリ, Accessible on-line: https://satokouen.jp/how_ows

(じんのうち・ひろみ/佐賀県立博物館学芸員)